

自然保護大学

日時：11月11日(土) 午後1時～5時

会場：札幌市立大学サテライトキャンパス(アスティ45 12階)

定員：50名(先着順)

参加費：3,000円(会員1,500円)

テーマ：日高山脈の自然の魅力と課題

講演：

1. 在田一則氏(北海道自然保護協会 会長)：日高山脈の生い立ちと地形の特徴

【プロフィール】

札幌生れ。学生時代は道内の山で山スキーを楽しむ。北大大学院理学研究科で日高山脈やヒマラヤの地質学的研究と教育に従事し、2005年3月に退職。専門は岩石学・構造地質学。2014年から会長。北大総合博物館ボランティア。

【講演要旨】

日高山脈は、十勝原野から見ると山岳画家坂本直行氏が描くように岬々たる山並が間近に迫っているが、西の日高海岸から見ると幾多の前山の遥か彼方にある。また、日高側の河川の土砂流出量は日本でも有数である。このような東西の非対称性は、日高山脈が、東北日本島弧に千島島弧が衝突している島弧-島弧衝突型の造山帯(山脈)であることに起因している。このため、日高山脈は、山脈を横断すると深さ20数kmの地殻の深部(西側)から浅部(東側)までのいろいろな現象(地殻変動)が観察できる世界でも稀なところである。アポイ岳ジオパークの独自の植生をもたらした地下数10kmのマントル岩石(かんらん岩)も衝突の産物である。日高山脈は日本でも有数の急峻な山脈であり、稜線のカールや十勝側河川のU字谷などの氷河地形が見られ、日高の魅力となっている。

講演では、日高山脈の生い立ちとともに、上述の地質と地形の特徴と魅力についてお話しする。

2. 植田幹夫氏・津守佑亮氏(十勝自然保護協会 理事)：二人が辿り着いた日高山脈十勝側水系の魅力～カヤック・沢登り・溪流釣りで知る原生自然

【プロフィール】

植田幹夫：兵庫県の揖保川上流域生まれ。鮎、鰻、アマゴなどに親しむ。その後大阪で高校教員に。一時期、大学の野生動物研究室に在籍したのが、自然保護や日高山脈との出会い。退職後は、兵庫と十勝の二拠点生活「半農半日高山脈」に入る。

津守佑亮：阪大工学研究科修士。JICA、外務省職員を経て、上士幌町で無農薬無化学栽培の百姓に挑戦。現在はバイオマスを活用した地域づくりコンサルタント。カヤック歴20年、熱気球パイロット、ハンター。4人の子育て中。

【講演要旨】

津守は、カヤックを担いで旅して回った日本の川やネパールの激流体験を通して見える、日本の川の姿について考察する。日本には多くの川があるが、自然な姿が維持されてい

る川が多いとは思えない。姿を変えられた川を見ていると、どうも窮屈そうだ。原始の川の姿は如何なるものか、是非見てみたいと思っていた。その一滴となって下ることで、自然の中に自分が含まれることを感じるのである。

植田は、日高山脈に足を踏み入れて約 30 年。初めての印象は、人里遠く、原始のかおりが色濃くする、遥かなる山並みというもの。長い林道歩き、沢登り、藪こぎ。日高山脈登山にはつきものの、これらの苦労を、これこそが日高山脈らしさであり、その自然が守られてきた理由だと気づいたのはいつだったろう。

今回は、日高山脈の原生自然の魅力を、登山や川下り、溪流釣りを通して紹介するとともに、特に歴舟川水系と札内川水系について、その特徴と問題点を比較検討したい。

3. 山北育実氏（環境省 帯広自然保護官事務所 自然保護官）：日高山脈襟裳地域の国立公園指定について

【プロフィール】

愛知県名古屋市出身。自然保護官（通称：レンジャー）。2004（平成 16）年に環境省に入省。自然環境局国立公園課、上信越高原国立公園戸隠自然保護官事務所、大雪山国立公園上士幌自然保護官事務所などを経て、2021（令和 3）年 4 月より現職。

【講演要旨】

2007 年度～2009 年度の国立・国定公園総点検事業において、日高山脈襟裳国定公園およびその周辺地域が国立公園の新規指定候補地として選定されたことを受け、北海道地方環境事務所では、2016 年度～2018 年度にかけて、当該地域の自然環境調査等を実施した。

調査の結果、地形、地質、動植物等について国立公園の資質に相応しい景観要素が確認されたため、2020 年 2 月に国立公園の指定および公園計画の決定にかかる基本方針を策定し、国立公園の新規指定に向けた調整を開始した。これら景観要素は現行国定公園区域の外側でも確認されたため、国立公園指定にあたっては公園区域の拡張も検討している。

また、日高山脈襟裳地域は原生性が高く、手つかずの自然が多く残る地域であるため、多くの登山道が上級者向けであることや公園区域内における利用拠点が限られることが想定されるため、国立公園の利活用に当たっては、公園区域外の利用拠点等と連携した取組が必要である。